

我が日本民族をキリストへ

日本民族総福音化運動協議会

Movement of Evangelizing All Japanese

第48号 (手束正昭先生特別追悼号)

日本キリスト教団高砂教会元老牧師であつた手束正昭先生は、本会の副総裁・総裁として20年の長きにわたってご奉仕してくださいましたが、2024年2月8日に主の御許に召されていきました。先生の主にある人格・識見、とりわけ聖霊に満たされた大きな信仰に思いをいたすとき、改めて私たちはかけがえのない指導者を失ってしまったことに呆然と立ち尽くすほかはありません。しかし、同時に主は新しいことをなされるお方。主はそのために残された私たちを新たな幻と力をもって励ましておられることを強く感じております。

ここに改めて手束先生との主にある友誼を与えられた者たちによる追悼の言葉を集め、尽きない感謝を主に捧げつつ、新たな思いを表明するために「手束正昭先生特別追悼号」を編集することといたしました。原稿は、主に当会理事、評議委員の皆様の中からお寄せいただきました。当会賛助会員の皆様におかれましては、当会の新たな出発点を覚えてお祈りいただければ幸いに存じます。皆様の上に主の豊かな祝福がなお一層注がれてありますように祈ります。

レハイム・キリスト教会 牧師 行澤 一人
理事・事務局長

手束正昭牧師を偲んで



聖福音聖川教会牧師
日本民族総福音化運動協議会(以下略)
前・副総裁／現・評議委員
當銘 由正

「これだ！」

手束牧師の「キリスト教の第三の波」の読後に思わず叫んだ言葉である。1994年4月のことである。最強のクリスマ神学の弁証論が出版された、と思ったからである。これが手束牧師と書物を通しての最初の出会いであり、私にとって幸運であつた。今年で早や30年になった。

1995年度、私は沖繩の南部教役者会の会長になったので、1996年度の「沖繩クリスチャン修養会」の講師に手束牧師をお招きした。修養会は大盛況であり、又、教役者研修会も沖繩全島からの参加で嬉しい悲鳴を上げたものであつた。しかし、手束牧師は、やはり「嵐を呼ぶ男」であつた。創立以来20年以上奉仕してきた福音派の神学校・聖書学校を私は辞任することになった。

沖繩には「教会作り委員会」として「日本民族総福音化(民福協)」として30年近く手束牧師に奉仕をして

もらった。先生は30回を超える沖繩での奉仕であつた。沖繩のために30年近くも毎年奉仕してくださいしたのは、おそらく手束牧師だけであらう。先生を通して沖繩の受けた恩恵は非常に大きなものである。近い将来、先生によつて蒔かれた種が芽を出し、花を咲かせ、多くの実を結ぶことを固く信じている。

私は先生が書かれた本によつて多くを教えられた者の一人である。又、旅行に同行して多くを学ぶことが出来たことも感謝である。韓国の早天祈禱ツアー、台湾のリバイバルツアー、等。更に、個人的には結婚30年、50周年の旅行での主にある深い交わりは、私の財産であり宝である。あと10年は共に「民福協」のために奉仕をしたい、と思っていたが残念である。手束牧師もさぞ無念であつたであらう、と思う。「民福協」の総裁、副総裁として二期奉仕できたことは感謝である。

(次頁につづく)

ところで、多くの方々は偉大な指導者であつた手束牧師の訃報を聞いて、将来の「民福協」が心配になつたのではないだろうか。ある方は、伊藤博文の死を偲んで読んだ山形有朋の「語り合い 尽くしし君は 先立ちぬ これから先の 世をいかにせむ」という歌を思い出したかもしれない。私も一瞬脳裏をかすめた一人である。しかし、私たちは吉田松陰が亡くなつた後、彼の教えを受けた「松下村塾」の伊藤博文、山形有朋、高杉晋作、その他多くの門下生が立ち上がり、明治維新という大業を成し遂げたことを知っている。

今や、手束正昭牧師の教えを受けた者、有形無形の感化を受けた者たちが立ち上がり、総力を結集して「日本民族総福音化運動」に邁進すべきではないだろうか。

手束牧師は、召された時、手を二度上げて、それから胸の前で両手を組み、祈りの姿勢で息を引き取つたという。おそらく、民福協の働きや高砂教会の将来、そして、御自身も主に委ね、勝利者として天の故郷（ふるさと）に凱旋されたのであろう。ハレルヤ！

全き恩寵としての

聖霊による日本のリバイバル



保守バプテスト同盟
市ヶ尾キリスト教会 牧師
評議委員・元理事
鮫島 紘一

手束先生との親しい交わりの中で私が最も印象に残ることの一つは、私たち日本人が戦後あまりにも自虐的な歴史観を持つているとの深い問題意識を先生が常に持たれていたことです。私も先生と同世代で、満州の生まれですが、この問題については先生を通して認識を全く新たにしました。

毎朝の早天礼拝についても、私たちの教会ではすでに行っていました。が、先生から大いに励まされたことの二つです。私たちの教会に來られた際にはご著書『朝早く、主に叫べ』をプレゼントしてくださり、そこから多くを学びました。

昨年先生と最後に言葉を交わした際、私はすでに教会を後任の牧師に任せ、名誉牧師となっていました。が、先生は元老牧師になることを勧めてくださいました。なぜ元老牧師がいいのかといえば、わずかも教会から謝儀を頂いて、それを教会に献金できるからだとおっしゃっていた言葉が今も心に残っています。

先生が何よりも願われていたのは日本のリバイバルです。そしてそのためにどうしても私たちに必要なのは、先生も明確に体験された聖霊のバプテスマです。先生が常に強調されていた通り、まさに聖霊は、救いと同じく、ただ恩寵によつてのみ与えられるものであり、信仰によつてのみ受け取られるべきものです。私たちの側には何の根拠もなく、全き神の恩寵として起こされるものなのです。ですから、先生の遺志を継ぐ私たちは、何よりも聖霊を熱心に求めましょう。日本の教会に聖霊のバプテスマを体験する多くのクリスチャンが次々と起こされることを切に願います。私たちは聖霊に満たされ、クリスチャンであることの感謝と喜びにあふれ、ますます伝道へとまい進してまいりましょう。

信仰の人、 手束牧師



大分カルバリーチャーチ 牧師
理事・会計監査
橋本守

「手束先生、一生懸命伝道したりするのですが、どうして教会に人が来ないのでしょか？」近隣の諸先生方との祈り会で、家内のした質問です。それに対する手束牧師の答えは、「それは、この場所を非常に強い悪霊が支配しているからです。」でした。これを聞いた私は救われた気持ちになりました。「そうか、悪霊が悪いのだ」と。伝道し、魂を導いても上手く行かない時は、失望落胆が大きく、結構自分を責めているものです。敵であるサタンの暗闇の勢力があるのだ。こうと分かれば、霊的戦いをすれば良い！

手束先生に大分へお越し頂いてから一年が経っていました。が、そのとき新会堂が見事に建ち上がったのです。霊的戦いに、自分は召されていたのかも知れませんが。この賜物を引き出して下さったのが、今は亡き手束正昭先生でした。

以来、何度か大分へお越し頂いて牧会の指導を頂いてきました。そういう中で、師に教えられてきたことは、「堅い信仰」です。いかなる困難にもめげず立ち向かう、その信仰には敬服致します。正に「信仰の人」です。日本の民族総福音化をビジョンに持ち、今日まで導いてこられました。道半ばで天に召されたことは、誠に残念でなりません。しかし、時かれてきた種は、必ず芽を出し成長し、豊かな実を結ぶこと信じます。

日本民族総福音化運動協議会の目標は、日本のクリスチャン人口が50%を超えることです。

神の思いと人の思いとは異なり、私たちの想像を遥かに超えた神の御業を信じます。神の偉大な働きを期待し、祈っていきます。

手束正昭師を追悼して

京都シオンの丘
キリスト教会 牧師
理事 後藤 利昭



高砂教会元老牧師手束正昭先生のご召天の報に接し、私の胸は大き

な穴が空いたようです。皆さんも同様のことを感じておられることと思います。美智子先生をはじめ、ご家族、高砂教会信徒の皆さんの上に主の慰めと励ましを豊かでありますようにと祈ります。

2003年5月、初めて京都のホテルで家内と共にお会いしました。当時、私は牧会上の問題で悩んでいて、どなたかに相談をしたかったので、先生との面識はあったものの、何処かのセミナーなどでご挨拶をした位でしたが、主が導いてくださいました。お会いして、簡単な自己紹介をしてすぐに問題を話しました。即座にその問題に対する牧師としての姿勢と事柄に対応することを的確にお話くださいました。私もその問題に対することを考えていましたが、それを確認するかのようにお話し下さったのです。丁度、武士が刀を抜いて最後に鞘に納めるようになります。

それ以来、毎年一回、二回と回を重ね2017年まで多くの恵みを私たちの教会に持ち運んで下さいました。教会として抱えていた問題とその回復、執事を立てること、新会堂建設、教会のリーダーシップつまり後継の牧師のことなど、個人的にも教会としてもセミナーでお話しくださり、おかげで教会の将来のための道備えをすることができました。これら一つ一つのが、ありがたく感謝に堪えません。

手束先生は執事の方々と同伴され諸教会を訪ね、励まし、力づけ、建て上げてこられました。教会内を建て上げつつ、会堂を建設していくという、そうした願いをもって日本の諸教会を力づけられました。また、先生とお交わりを深めてゆくとき、先生は日本の諸教会の中に強い成熟した教会が生み出されることを願っておられるように思いました。葬儀の時、出席しておられる先生方の様子を見て、手束先生は様々な教団や群れとの幅広い交わりをもってこられたこと、そして「イエスは主、救い主」という言葉通りの働きをしてこられたことを知らされました。

栄光在主。

手束先生を天にお送りして

レムナント出版 代表・牧師
理事 久保 有政



手束正昭先生は、大きな教会をつくられましたが、単に自分の教会の発展だけが念頭にあったのではな

く、日本全体の宣教と、魂の救いを第一に願った方でした。日本人の覚醒のために、日本全国どこでも、たとえ少人数の教会であっても、招かれれば、たとえ謝礼がないような場合でも行つて宣教されるという方でした。

私はそういう先生に接しながら、その献身的な伝道姿勢に深い感銘を受けたものです。私がかつて牧会していた東京の教会にも、説教に来てくださったことがあります。また、単にこうした伝道への熱心さだけでなく、先生は年齢を重ねても常に読書を欠かさず、いつも広い知識と深い知恵を持つておられました。ですから、そうした先生から「文脈化（文化適応）の伝道をもとに民族総福音化を目指した運動を立ち上げたいから、あなたもぜひ入ってくれ」と言われたときには、二つ返事でお受けした次第です。

先生はその後さらに「日本のキリスト教会は世間から反日左翼のように思われているが、これはいけない」と言い、それを打破するために、健全な歴史観に根差した伝道を志す別の伝道団体「日本を愛するキリスト者の会」をも立ち上げて下さいました。そして私がその事務局長に任命されました。こうした働きの中で先生との交わりを重ねていくなか、さらに先生の霊性の深みを感じさせられ、多くの示唆を与えられた次第です。

先生が召天されたとの知らせが

入ったときは、深い悲しみと寂しさを覚えると共に、茫然自失になりました。またひとり、大きな先生をこの地上から失った―しかし先生は天国から私たちのために祈ってくれるので、私たちも自分に来ることをなし、主にあつてさらに前進していかなければならない、との思いを持つに至りました。

先生は伝道者としての大きな模範を残されました。その模範に従いながら、民福協を今後も発展させていくべきと思っております。

手束正昭師を追悼して



京都グレース
バイブルチャーチ 牧師
理事 関 誠

敬愛いたします、手束先生。フレイルで体調を崩し療養しておられましたが、少し休まれたら元気に復活されると思い、とりなしのお祈りしてきました。本年1月29日の民福協の理事会のさい、オンラインで見た先生はとても痩せておられて驚きまし

た。武漢熱コロナの影響でお見舞いに伺うこともかなわず残念で心苦しかったです。

2月8日に天に召された訃報をお聞きしました。覚悟はしておりますが、地上でのお別れはやはり寂しいです。

先生は母校、極東聖書学院で教授をされ、学生達から、鬼の手束と恐れられ、厳しさの中に将来に有効な深い講義をしてくださいました。1996年に教会開拓伝道をスタートしたことを大変喜んでくださり、翌年から毎年かかさず来てくださって、健全な教会成長、リーダー訓練、会堂建設などについてご教授頂きました。沢山の名言の中からいくつかを取り上げますと、「信徒の顔色を見て一喜一憂してはいけません。」「譜代のリーダーを育てるのです。」「賛美も良いし、教会の雰囲気も良い、なのはどうしてこの教会は成長しないのでしょうか?」「正直、そのときは心に刺さりましたが、わたしにとつては忘れられない叱咤激励です。また、ある時に土地建物合わせて2億円で建てましょうと預言のように語られました。それから数年後まさにそのとおりになりました。

5年前、新会堂建設の計画が進み、銀行融資実行日の3週間前になって、私自身が心筋梗塞で倒れました。入院中先生がお一人で電車で乗って病院に駆けつけてくださり、お祈りをしてくださいました。先生に

は癒しの賜物があり、特に循環器系に強い。病室では熱くお祈りできないので、車の中で熱く声を上げて回復のお祈りしてくださいました。恐縮でしたが、とても嬉しかったです。本当に励まされました。

2003年に日本民族総福音化運動協議会が立ち上がりしました。(初代総裁は奥山実師)。分派の多いキリスト教界にあつて、「イエスは主、我らの救い主」、この一点のみを共通点として、違いを認め合い、日本民族の救いのために一つになる宣教団体としてスタートしました。

2015年より手束牧師が総裁を務めました。総裁は、日本人の肌にあつた伝道を目指すこと、特に、戦後の日本人の中に深く蔓延している自虐史観からくる罪責感から解放されてこそ、日本人に健全な誇りと愛国心を甦らせ、自由闊達に福音宣教ができるようになること、を舌鋒鋭く説き続けてこられました。

不肖な者ですが、師の志を受け継ぎ、聖書と共に、日本人にとつて何が大切であるかを示した「教育勅語」を手本としながら、これ以上の倫理道徳観の低下と極端な個人主義の横溢を防いでいくこと、そして人は創造主の道、真理、命、すなわちイエス・キリストなくしては生きていけない者であることを語り続けてまいります。

手束先生の意志を受け継ぎ、継続したい



新宿復興教会 牧師
理事 菅野 直基

手束先生との出会いは、日本民族総福音化運動協議会が発足した2003年のある日です。第一印象は、こわもてで高級スーツに身を固めていたので、権威的で威圧感を感じました。しかし、付き合い続けると、その第一印象が良い意味で裏切られていきました。第一印象そのままの厳しさと共に、その内側には優しさが隠されていました。

手束先生は、力がある相手にも物おじせずに物事をハッキリと仰る方だと思いますが、同時に、若くて力のない相手には丁寧で親切な方でした。私と手束先生の思想が一致するかどうか、半分は違うと思います。私の政治観は、中道保守です。左翼的な思想や団体には違和感を感じますが、同時に、右翼的な団体にも似たような違和感を感じます。左翼的な

考え方で苦手な部分は、「これこそが正しい！ それ以外は間違いだ」というような、狭さと他を排除する点です。そこに息苦しさを感じます。それは右翼的なものの中にも感じます。しかし、手束先生は、ご自分の信念をハッキリとお持ちであり、またご自分の意見をはっきりおっしゃりながら、誰をも排除することではなく、思想の半分は一致していない私でも居心地の悪さを感じることはありませんでした。

次第に、手束先生というリーダーの魅力を感じるようになり、好きになり、心から尊敬するに至りました。惜しいリーダーを先に天に送ることになり、喪失感と寂しさを感じます。ご遺族・近親者・関係者のために、心から主の慰めをお祈りします。

しかし、一念発起して、手束先生の意思を受け継いでいきたいと思えます。日本民族総福音化、つまり、日本のリバイバルのために改めて立ち上がりたいと思えます。それは、聖書から出る明確な思想とメッセージを持つと共に、器こそが大切だと思えます。なかなか手束先生に代わるリーダーを見つけることは難しいです。それは無理です。しかし、残された私たちが、イエス様のご人格を目指し、イエス様が「良し」として用いられる器に整えられ、先生が続けられたこの働きを、継続していききたいと心から思う次第です。

この協議会が 大切にしてきたこと、 大切に していくこと



日本キリスト教団 高砂教会 牧師
理事 新谷 和茂

手束総裁という大きな存在を亡くして思うことは、キリスト教会の歴史はこのようなことを繰り返してきたが、今日に至っているということである。大きな存在がいて新しい領域が切り開かれるでしょう。しかし「ダビデはその時代に主に仕えた」とあるように、その大きな存在もその時代に主に仕えるのであって、次の時代には次の世代に引き継がれるのです。それはモーセからヨシュアに引き継がれたように、本人達の意志以上に神様の意志によってなされるのです。引き継いだ者はそこに神様の意志を受け止める覚悟と忠実さが求められます。しかしそれはこれまでのやり方をいつまでも継承することではなく、次の世代に相応しいやり方に変更し

ながら、その使命に仕えていくということだと思えます。

それではこの協議会の使命は何でしょうか。私なりに明確にしておきたいと思えます。この協議会は立ち上げ当初から「日本民族」という名称にこだわってきました。それは韓国民族総福音化運動の元総裁であった申賢均先生の肝いりでスタートしたということもありますが、この「日本民族」という名称に対して様々な意見を受けても、我々は敢えて「日本民族」を掲げ続けました。それはこの協議会が、日本人の、日本人による、日本人のための福音伝道ということにこだわってきたからです。つまり、日本民族も神様によって創造され、神様の深遠な計画のもとで、固有の歴史と文化、民族性を形成してきたのであり、日本民族が神様の御手に戻されることによって、神の国の完成のために用いられることをこの協議会は目指しているからです。ですから敢えて、名称をカタカナや英語にせず「日本民族」としてきました。

手束総裁の亡き後も、この使命のもとに教団教派、カトリック、正教会にこだわらず、またこれまでのキリスト教界の伝統に縛られず、聖書に根ざしつつ、「イエスは主、我らの救い主」という信仰告白だけで一つとなつて、これからの「日本人の、日本人による、日本人のための」福音提示と教会形成のあり方を大胆に発信していけたらと祈る次第です。

手束正昭師を 追悼して



北広島チャペル
キリスト教会 牧師
理事 木村 恵一

勝手ながら「我が師」とも仰ぎ見させていたたく手束先生のご召天は、キリスト教的表現ではありませんが「巨星墜つ」との衝撃を受けると共に、深い悲しみと寂しさ、そして憂いを覚えざるを得ませんでした。

これまで手束先生から神学的・霊的な教えと、そのご人格とお人柄からの薫陶をいただけました幸いを改めて思われ、主と今天におられます手束先生に心から感謝するばかりであります。

また、この国の救霊の柱、そして魁となつて躍動されておられました尊いご存在を失いました故のこれから

の憂いもあります。けれども、それに従う強者なる民福協の頼もしくも敬愛致します諸先生のご存在が、誠に大きな励みであり、救霊の確固たる力でありま

に手束先生の遺訓継承なる救霊愛国の旗を掲げて、いよいよ立ち上がって行けますことを心よりお祈りして参ります。

手束正昭牧師を 偲んで



金武バプテスト教会 牧師
理事 横田 聖子

日本の教会史上で神の器として特別に召し出され、その選びに対し真摯に神と共に歩まれた高砂教会と手束正昭牧師を心から尊敬します。御言葉は聖霊によって解き明かされ、聖霊は御言葉とともに力強く、また生ける水の流れのように命をあたえます。

1975年、手束正昭牧師と高砂教会の聖霊降臨の体験は日本の教会史にとってビフォー・アフターの節目をもたらし、現在にいたるまで教団教派を超えて、聖霊の実在と働きを体験的に、そして神学的にも確

立してくださいました。

わたし自身は、教会で伝道師として仕えている頃に、高砂教会の執事役員研修会に参加させていただいたことが、一番印象深く思い出に残っています。そこで、参加した執事役員会は、ホテルの大会議室に整然と並ぶ白いテーブルクロスがかけられた会議テーブルを囲んで、まるで大企業の取締役会のような雰囲気でした。手束牧師の神の国に仕える教会が、どれほど価値が高いものかという信仰を学びました。

日本の教会が、そして日本が向かうゴールがイエス・キリストに定められる日を神ご自身が望んでおられ、聖霊は日本の教会を導いておられます。大牧者なるイエス・キリストを頭とする教会が形成され、日本人の霊的覚醒の日を幻でみせられていたであろう手束正昭牧師の信仰の歩みは、まさしくヨシユアの如く生きた神の尊い器です。引き続き、神と共に歩む日本の教会がたてあげられ、主の栄光輝く日を待ち望みます。



手束正昭先生、 有難う ございました



CBMCアジアパシフィック 副会長
理事 井上 義朗

まだまだ、先生が必要なこの地の状況なのに、神様は天に引き上げられてしまいました。真に残念ですが、計り知れぬ神様の御計画を担われるのだとお祈り致します。

私が手束先生と親しくお話ししたのは、20年程前に韓国の国家朝餐祈禱会へ御案内した時でした。それ以前にもお会いしていましたが、個人的にお話し出来たのは美智子夫人と3人で韓国へ御一緒した4日間でした。私自身は、CBMCという世界組織のビジネスマンクリスチャンの伝道団体に所属して世界の国々への伝道に召命のある者です。私が手束先生に特別な敬意を抱いたのは、先生が高砂教会を牧会されながら、世界中の聖霊の働きと民族の動向に広い視野をお持ちであった故です。

先生の標榜される「聖霊による工

キムニカル」は教派だけでなく、民族を超えるものであったと思います。世界中で起こる聖霊の働きを観察し、学び、それを自らが中心となつて、日本の教会に広める役割を担ってこられた方でした。

併せて人間の霊的な観察にも優れ、各々の民族が持つ歴史的要因による思い込みや国民感情など、聖霊の働きを妨げる要因を分析され、我々の伝道の方向を見定めておられました。そして、方向が定まり、主の導きと確信されたら、誰が何を言おうと実行し強い信仰をお持ちでした。

世界の福音化の要諦として、日本人が日本と日本人を愛する事と日本に於ける伝道の文化適合化の必要を知る先生は、「日本民族総福音化運動」を祈りをもつて推し進められました。また、先生は優れた霊的洞察力に加え、それを多くの人に伝える文章力にも長けておられ、有難い事に、我々は今後も先生の遺された多くの著書により、必要な時にその教えを確認することが出来ます。

今後来るべき日本のリバイバルも、備えられたこの道の先にあるものと確信しております。即ち日本は知らずして神の憐れみの中に置かれた国である事を知るに至り、日本文化の中にも既に福音が内包されており、日本人達は知らずして聖書の神を拝していたことになる」との先生の言葉通りの事が起こる事です。

感謝を込めて、シャローム。

社長の第一の仕事は

次の社長を見つけること



家の教会 信徒
理事 氏原 稔

手束先生の葬儀で感じた第一の点は、神に捧げられた器の成せる大きさです。まさにブルドーザー。その反面、召された後、後継者の不安が残ります。高砂教会では長きに渡り手束先生不在が続き、心の準備が進んでいた様子。「いつまで泣いているのかバカ」葬儀で、手束先生のお言葉を引用された新谷主任牧師のお話が不安を軽減します。

その一方で、先生の興された宣教団体では不安が募ります。国内中小企業の60%が、後継者不在で倒産の危機に。冒頭の言葉、「社長の第一の仕事は次の社長を見つけること」は全てに当てはまります。もともと早く重責をお譲り頂いておれば。と同時に依存する役員や人任せの会員の資質にも問題が。日本民族総福音化の看板も問われます。

殆どの日本人がキリスト教会に無関心な状況は一向に変わりません。民福協が現在最も力を入れている放送プロジェクト『聖書の力』でさえ、会員の一部しか視聴していない現実。日本人の心に届いているか、猛省が求

められます。企業なら既に倒産です。

さて、当会は、正しい歴史観を掲げ、日本の福音化を目指し発足したはず。この点が殆ど語られていないのでは。私が会社を退社した時、「残りの人生は私のものだ」との、主の御声を聞いたように思います。すぐに久保有政著「神に愛された国、日本」——日本人に生まれてよかった。命をかけてでも守りたい日本という国があった——に出会いました。残りの人生の全てをかける価値を発見。古来より東周りで日本に伝えられた聖書が、神道や仏教に深く浸透していることを知る。日本人こそ、聖書の民だった——大発見です。日本人の心の板に書き記された神の言葉が、日本人を律しています。何と、これまで外面でしか同胞を捉えていなかったことか。

世界は大変革の時代に突入。世界の憲兵・米国の衰退が顕著。日米同盟さえ危ぶまれています。逆に戦勝国・米国の抑圧から解放される時が到来。正しい歴史観を取り戻す時です。言葉ではなく行動を起こす時が来しました。

9・11同時多発テロ以後



聖書と日本フォーラム
牧師
評議委員
畠田 秀夫

2001年9月11日午後9時46分(日本時間)でした。私が大阪でのキリスト教大会に出席して帰宅したのが9時過ぎでした。その集会で手束先生夫妻と親しく会話を交わし、帰宅してテレビを見ると、今まさにマンハッタン貿易センタービルに対するテロ攻撃が敢行されたところでした。これには非常に驚かされたのですが、ちょうど、その時から、手束先生との交流が頻繁になったように思います。

その一ヶ月後、10月8日、私が関わっている「聖書と日本フォーラム」第8回奈良飛鳥大会の講師として

手束先生をお招きし、景教徒の信仰について語っていただきました。また2005年8月の暑い日にクーラーのない大部屋で氷柱を数本立てた伊勢志摩での第6回目の研修センター(私が大阪から移住して2年後での講師として手束先生を再度お迎えしたので、そこで語られた「日本とイスラエル同祖は宣教に光をなげかけるか」との熱弁に全員の心は鼓舞されたものです。

日本人を真正面から見つめて宣教される手束正昭先生の姿勢と熱き魂の情熱は、天に帰られた今も、私の心に焼きつけられています。



聖霊に導かれ、日本を愛し 日本を語られた 手束正昭先生



日本キリスト教団
御器所教会 信徒
加藤 知子

手束正昭先生との出会いは、『ハーザー』誌2011年12月号掲載の「日本宣教の突破口…大東亜戦争は本心に侵略戦争だったか(その十二)」でした。日本各地の教会で、判で押したように繰り返される近代史のメッセーじに疑問を感じていた矢先でした。特に第二次世界大戦は世界中の国々を巻き込んだ戦争で、それを語る時、視点が一つだけであるはずがありません。日本基督教団の牧師先生で、異なる視点をお持ちの方がいらっしやるのは驚きでした。もちろん手束先生も全知全能の神ではないので、先生の歴史認識が絶対に正しい、ということもないでしょう。歴史を語りつくすのは誰にとっても容易では

なく、新たな資料が発見されれば、都度見直されるべきものだと思います。手束先生は日本での基督教伝道に熱い思いがありました。日本では伝統がある教会の歴史でも200年に届きません。しかしながら、そもそも基督教の歴史もわずか2000年です。全知全能の神、霊魂の永遠不滅を説く宗教にしては年数が短いですね。日本の歴史の方が長いのです。ユダヤ教はもう少し遡ることができません。イスラエルがまだアブラハムを先祖とする家族という存在に過ぎなかった時、エジプトやヒッタイトでは既に洗練された文明・文化が栄えていました。

福音が日本に広まるにはどうすればいいのでしょうか。約2000年前のある時点でイエス・キリストが我々の罪を贖ってくださった、という命題に力強く然りと答えるためには、理屈や知識だけではなく聖霊の働きがやはり必要になると思います。手束先生は明確な聖霊体験をお持ちで、困難を乗り越える時には、この体験に何度も立ち返られたのではないかと拝察します。

このようなわけで、手束正昭先生は、日本の基督教界という文脈では、大変稀有な、有難い存在であったと言えましょう。手束先生が天に召されて後、残された我々を導いてくださるのもまた聖霊の働きだと信じて進んでまいりたいと存じます。

私を決断させた

手束先生の一言



JECチャペルらぶり 牧師
理事 宮谷 泉

手束先生との初めての出会いは、私が関西聖書神学校の神学生時代のこと、奉仕神学生として高砂教会に派遣されたのがきっかけです。次に手束先生にお会いしたのは、私が神学校を卒業し、神戸新開地にある神戸中央教会の副牧師として4年間働いた後に、教団から石狩市にある石狩栄光教会の開拓伝道に12年間派遣されている期間のことでした。手束先生は、そのとき、ちょうど、後進の指導のために札幌市周辺にある教会を支援するために教会成長のためのセミナーを開催しておられたのです。そうして三度目は、2000年に奈良福音教会に着任した頃です。その時すでに日本民族総福音化運動協議会が立ち上がり、日本全国に展開するようになっていましたが、手束先生からいきなり奈良県の支部長をしてくれないかと依頼を受け、引き受けることになりました。

そのような手束先生との交わりの中で、その後の私の牧師生涯を決定的に変えてしまう事件が起こりました。それは韓国釜山で開催された教会成長のセミナーに一緒に参加した時のことです。私は以前から日本の宣教を妨げている要因は日本の伝統宗教である仏教と神道であるとの確信が与えられ、研究をはじめていましたが、その内容を会食中に手束先生に聞いていただいたのです。そして、その時、「現役牧師から、仏教のことをここまで分かり易く聞いたのは初めてだ」と言っておられました。その一言で私は「伝道のための戦略的仏教学入門」という名で巡回伝道する「アテネ・ミニストリーズ」を立ち上げる決断をしたのです。その後、高砂教会の役員セミナーや礼拝にもお招きいただき、今日に至る私の宣教の基盤をつくっていただきました。心より感謝しております。

託されたバトン



コミティッドジャパン浜松 牧師
理事 安間 孝明

手束正昭先生が天へ歸られた。今年1月29日に理事会があり、全身全霊で「日本のリバイバルを希求している姿」を私たちにを見せて、天に歸られた。

手束先生を私が知ったのは、自分が大学生だった頃だ。韓国の断食祈祷院で聖霊のバプテスマを受けた。異言の賜物をもらい、それが物議を呼び、自分の傲慢さもあり、聖餐停止となった後の事だ。ショックと混乱で自殺を真剣に考え始めていた。その折、ちょうど、高砂教会におけるカリスマ刷新の出来事が、毎日新聞紙上、連載で紹介されていた。この記事によって「やはり、日本がリバイバルされるには、この霊的方向性で間違っていないのだ。」と思われた。

それから、15年程の時間が流れた頃、3日間同じ夢を見て、開拓の召

しを頂いた。名古屋の牧師会に参加するようになり、A牧師と会った。彼は、日本民族総福音化運動協議会の東海ブロック長だった。『あの手束先生と親しくされているのか、凄いなあ。』と羨ましく思っていた。そんな中、韓国ケソンの成長している教会でセミナーがあり、参加した。そこで、手束先生から「先生の教会に行きましようか?」と言って頂いた。「小さい教会ですから」と恐縮する私の言葉に、手束先生は「小さい大きいは関係ありません。小さい、だからこそ必要でしょう。」と言われた。それを機会に日本民族総福音化運動協議会に加盟した。

それから、数年経過した頃、わたしの携帯へ手束先生から着信があった。驚いて連絡すると、間違い電話だったが、それがきっかけで再開した先生との交わりによって、大きな励ましを頂いた。さらには東海ブロック長まで拝命した。手束先生をお招きしての東海ブロック集会を開き、3回の訪問を頂いた。

あるときブロック長会議へ参加するにあたり、東京23区全域で放送されるラジオ番組「聖書の力」(週一回、15分番組)と、これと同じコンテンツを用いたYOUチューブ番組の制作を民福協で担っていくことを手束先生に提案したところ、先生に「総裁推薦で先生を理事に推薦するので、理事になつて、そのことを理事会で話して下さい。」と言われた。手束先生の

言葉には聖なる威圧感があり、これもお受けすることになった。この提案については理事会で賛否が分かれたものの、手束先生の一言で、提案通り、タイトルもそのままに承認された。私は、その決断にリバイバルへの情熱を見た。

多くの主の働き人が「この日本こそが、主から最後のバトンを託されたランナーである」と預言している。手束先生もそのために神が立てられた器の一人であることは間違いない。その手束先生に推薦されて、私がこ

の働きに携わるようになったことにも大きな意味があると信じている。

主は、日本をこのままには捨て置かない。「やがて私たちはリバイバルという言葉を超える神の国の到来を見る!」と言われる。その日が近い。だから手束先生から託されたこの働きをどうしても全うしなければならぬ。いや、主がなさつて下さる。「小さいからこそ、この信仰が必要だ」と、手束先生は教えてくださったのだから。

あなたに聖書のメッセージをお届けします。

絶賛放送中!

ぜひ、視聴してください!

「聖書の力」

検索

YOU TUBE 動画配信中

毎週日曜日22時30分から15分のメッセージが

レインボータウンFMから

東京23区に88.5MHzで発信されています。

お祈りと
献金の
お願い

運営のために毎月6万円の必要があります。
この民福協のメッセージを全国に届けるために
奮ってご献金をお願いします。
ご献金に際しては、
「メディア献金」と趣旨を明記してください。

手束正昭牧師召天記念礼拝

【手束正昭牧師略歴】

1944年 中国・上海にて出生。

1969年 関西学院大学神学部修士課程卒業（神学修士）。その後、同学部助手を経て、1973年 日本キリスト教団高砂教会牧師に就任。その後、高砂教会主任牧師、元老牧師を歴任。名誉神学博士、牧会学博士。

1975年 聖霊降臨の出来事に遭遇し、その後、カリスマ的信仰に転進する。

日本キリスト教団聖霊刷新協議会・代表世話人、顧問、及び日本民族総福音化運動協議会・副総裁、総裁などを歴任。

2024年2月8日、永眠。



手束正昭牧師が今年2月8日に天に凱旋されました。

「良くやった、忠実なしもべよ」 その言葉の通り命尽きるその時までご自身に与えられた使命を全うされました。

3月20日高砂教会において『手束正昭牧師召天記念礼拝』が捧げられました。生前、親交のあった方々と手束牧師を偲び、恵みを分かち合い、また日本のリバイバルを覚える時となりました。



日本民族総福音化運動協議会趣意書

＝醒めよ日本！起こせキリストによる精神革命＝

大いなる主の御名を崇めます。

現在私達の国、日本は大きな危機の中に置かれています。それは決して経済の危機ではありません。精神の危機であります。その兆候を私達は端的に子供達、若者達の中に見ることができます。暗く沈み、眼の輝きの失せた、子供達、若者達の中に、明日の日本の希望を見つけることはできません。日本は確実に衰退の方向に進んでいます。そしてこのような祖国の危機的状況を救うのは、実にキリストによる精神革命以外にありません。今こそ、私達日本のクリスチャンが、教派、教団の壁を乗り越え、教理、神学の枠を乗り越え、日本の救いのために立ち上がることが求められています。

私達はこのような危機意識の下に決起し、2003年6月に「日本民族総福音化運動協議会」を立ち上げました。この運動がわざわざ“日本民族”と銘打ったのは、日本の国と民族をキリスト教信仰によって再建しようと強く意識したことにより、それ故に日本の歴史・文化・伝統に文化適応した福音の提示を積極的になしていきたいと願っているからに他なりません。

しかもこの運動は文字通り超教派的運動であり、「イエスは主、我等の救い主」と告白する者ならば、誰でも参加することができるもので、決して神学や信条を問いません。更にこの運動は、これ迄の日本のリバイバルを求める団体と競合するものではなく、むしろ、既に日本において起こされていた日本のリバイバルを求め、日本の救いを求めてきた諸団体や個人との良き協力関係の中で押し進めて行かなくてはならないと考えております。その意味で、これ迄日本のリバイバルや救いを求めてこられた方々の積極的な協力と参加を心より願う次第です。

以上の趣旨をご理解の上、是非とも、この運動にご参加下さい。共に、日本の救いのために立ち上がって参りましょう。

日本民族総福音化運動協議会

総裁 手束 正昭(高砂教会主任牧師)*2015年6月時点での肩書表記。